

あ、
出た



遺跡で ブラダモリ in 水戸展

～再発見！ 水戸黄門は
なぜ人気があつた？～

展示解説シート

開催趣旨

2017年1月28日、NHK総合の人気バラエティ番組「ブラタモリ#61 水戸」が放送されました。

ブラタモリとは、冒頭で出される「お題」の謎を解き明かすため、まち歩き達人・タモリさんがまちをブラブラ歩き、歴史や地形の魅力を発見するという番組です。

水戸で出されたお題は「水戸黄門はなぜ人気があった?」でした。番組では水戸藩第2代藩主徳川光圀みつくにの父・初代頼房よりふさの城郭及び城下町整備、光圀の上水道整備、光圀を慕った第9代齊昭なりあきの学問・教育改革について、タモリさんが「現場」を訪れながら、ブラタモリならではの視点で検証・紹介しました。

ここで注目すべきはタモリさんが歩いた現場が、すべて遺跡であるということです。

そこで今回の展示では、ブラタモリ#61のお題を引き継ぎ、水戸黄門人気の秘密をより理解するため、「遺跡」という切り口から、水戸城、水戸城下町、笠原水道、弘道館、偕楽園にまつわる最新の考古学調査の成果をご紹介します。

本企画展をとおり、皆様に水戸の遺跡についての理解を深めていただければ幸いです。

プロローグ —— 近世遺跡の“物量”が物語ること

江戸時代、つまり近世の遺跡を発掘するとすぐに気づくのが、出土遺物の量が多いことである。縄文時代や中世の遺跡とは比較にならないほど、とにかく量が多く、しかも種類が豊富なのだ。

近世は256年という長い平和社会が到来した稀有な時代である。人々は泰平たいへいの世に感謝しながら、家職かしょくをいそしんだ。武士は地方官僚となり、治安を維持し、交通網を整備した。百姓や町人は稼げるモノを作り、交通網を活用して活発な商取引を行った。人やモノの往来は全国津々浦々にまで及び、町や村には様々なモノがあふれるようになった。遺物が多いのも当然といえる。

こうした近世遺跡から出土する遺物は、当時の生活や社会を生々しく伝える物証である。そして出土量や種類が多ければ多いほど、当時の歴史を解き明かしやすくなる。

水戸は御三家水戸徳川家のお膝元。近世の遺跡も当然多い。とくに平成17年以降は、毎年のように発掘調査を行い、膨大な量の遺物が出土している。今回はその中から、ブラタモリで取り上げられた5つの遺跡——水戸城、水戸城下町、笠原水道、弘道館、偕楽園にスポットをあてた。近世遺跡の“物量”をもとに、水戸の歴史をブラブラ解き明かしてみたい。



図1 大量の遺物が混入した近世の盛土(水戸城跡)

1 水戸城と水戸城下町の成り立ちとは？

水戸城というと、近世に造られた城郭というイメージが強いと思うが、実はその成立は平安時代末～鎌倉時代はじめ頃にまでさかのぼる。

築城したのは常陸平氏の惣領・馬場資幹そうりょう まげもと。資幹は現在の水戸第一高等学校付近に館を築き、水戸一帯を支配した。その後、江戸氏、佐竹氏と城主が交代していく中で、城と城下町の整備が何度も行われた。

水戸城の発掘調査では、江戸氏・佐竹氏時代の大規模な造成跡や、敵の侵攻に備えた堀の跡などが発見され、中世水戸城において活発な人や物の動きがあったことが判明している。特に、江戸氏による工事の跡は、発掘調査ではじめて明らかになった事実である。江戸氏は全国的に無名の国人領主であるが、彼らのような地に根を張った領主の評価なくしては、近世の水戸は語れない。

慶長8(1603)年、徳川家康11男の頼房が水戸城主となり、徳川御三家の一つ・水戸藩が誕生した。頼房は寛永2(1625)年から城と城下町の大整備に着手しようとするが、水戸藩は江戸での生活(定府)が他藩と比べて多く、財政難に苦しんでいた。そのため、城と城下町の整備に際しては、江戸氏や佐竹氏が形作ってきた中世水戸城の設計(縄張)を引き継ぎながら工事を進めた。すなわち、あるものを最大限に活用しながら、関東最大級の城下町・水戸は成立したのである。

このような城下町の発掘調査は、水戸城に比べて件数は少ないものの、釜神町遺跡(武家地)、東組遺跡(町人地)、茨城高等学校遺跡(寺社地)など、調査事例は着実に蓄積されつつある。



図2 江戸氏による土木工事に伴う埋納銭(水戸城跡)



図3 佐竹氏時代に造られた堀(水戸城跡)

II 笠原水道の驚きの構造とは？

水戸城下町が繁栄するにつれ、城の東側に広がる湿地帯にも町割りしもちが形成され(のちの中市)、多くの武士や町人が移住した。しかし、湿地帯から湧き出る水は濁っており、飲用には適していなかったため、慢性的な飲み水不足が大きな問題となっていた。

そんな中、黄門様でおなじみの徳川光圀が寛文2(1662)年に第2代藩主となる。そして光圀が藩主として最初に手がけた事業が、水不足を解消するための水道設置工事であった。

水源地は、笠原不動尊一帯の湧水地が充てられた。笠原水道は暗渠構造となっており、水戸城下町で採掘される「神崎岩」という軽くて丈夫な石(凝灰質泥岩)を組み合わせ、岩樋と呼ばれる水路とした。通常、岩樋は異物が混入しないよう組み立てるが、発掘された岩樋を見ると、あちこちに隙間があることが判明した。この隙間は、岩樋周りの湧水を入らないようにするのではなく、入るようにするという逆転の発想によるものと考えられている。さらには、岩樋の下に砂利を敷き詰め、湧水を濾過してから岩樋に取り込むという工夫もみられる。

こうして完成した笠原水道は、総延長約10.7キロに及び、水戸の飲み水事情が大幅に向上しただけではなく、昭和7年まで使われ続けたのである。

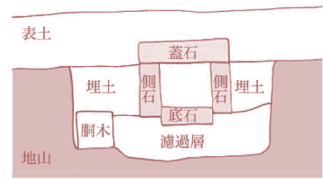


図4 笠原水道の構造模式図



図5 発掘された笠原水道。近代には岩樋内に土管を通した。

III 弘道館と偕楽園の深いつながりとは？

徳川光圀が手がけた重要な事業が、歴史書『大日本史』の編さん事業である。光圀はこれまでの武力による統治(武断政治)から、学問・教育(儒学)にもとづく統治(文治政治)への転換をこころざし、その基礎として、儒学思想による歴史書の編さん事業を開始した。

『大日本史』編さん事業は約250年も続き、その後の水戸藩の学問の礎いしずえとなった。事業の過程で水戸藩士が全国各地を取材したことが、のちの水戸黄門漫遊記につながったという説もある。その真偽はともかく、光圀の名を全国に広めた『大日本史』なくして、現在の水戸黄門人気はなかったと言ってよいだろう。

光圀没後100年に生まれた9代藩主・斉昭は、特に光圀を敬愛した藩主として知られている。斉昭は編さん事業で培った学問・教育をさらに発展させるため、天保12(1841)年、藩校弘道館を設立した。弘道館の敷地面積は日本最大の10.5ヘクタール。近世藩校の到達点とも言える壮大なものであった。現在は閑静な佇まいであるが、発掘調査ではゴミ穴とともに日常什器などが出土した。当時をもっと生活感あふれる雰囲気の中で、学問に没頭していたのだろう。

また斉昭は、その翌年に庭園・偕楽園を開園する。偕楽園は梅の名所として有名だが、実は弘道館における勉学の余暇の場としての意味が込められていた。勉学と余暇を組み合わせ、心豊かな人格を形成しようという思想——これを一張一弛(緊張とリラックス)という——は、光圀以来の伝統であった。こうして斉昭は、光圀の思想を継承・発展させ、弘道館・偕楽園を切り離すことのできない一対の学問・教育施設として創設したのである。

さらに、斉昭は偕楽園屋下に陶器製陶所を作り、殖産興業の一環として陶磁器(七面焼)を焼成させた。発掘調査では大量の未製品とともに「偕楽園」の銘款が押された花生が出土している。一張一弛という儒学思想を実現するとともに、「偕楽園」ブランドを売り出そうという、斉昭のしたたかな戦略が見て取れる。



図6 弘道館の発掘現場

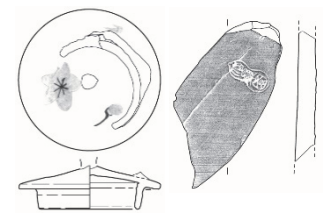


図7 出土七面焼。右が偕楽園銘のある花生、左が梅花をあしらった土瓶蓋。(縮尺不同)

おまけ 水戸納豆なぜ誕生した？

明治4(1871)年、廃藩置県により水戸藩は廃され、近代水戸が幕を開けた。教育施設であった偕楽園は、近代になると、東京から日帰りが可能な格好の観光スポットとして一躍人気となる。そのきっかけとなったのは、明治22(1889)年に開通した水戸鉄道(のちの常磐線)。そして鉄道開通に合わせて、水戸土産として全国に広まったのが納豆であった。茨城県は小粒大豆の有力産地であったから、この大豆を水戸で加工し、鉄道開通と偕楽園の観光地化の波に乗せつつ、水戸納豆としてブランド展開し、大成功を収めたのである。

光圀・斉昭の思想が詰まった偕楽園は、鉄道開通により観梅のメッカとして新たなブランドを獲得し、梅の町・水戸が誕生していく。こうした近世から近代への移行の象徴の一つとも言うべきものが、水戸納豆なのではないだろうか。



図8 偕楽園臨時駅に残る近代のプラットホーム

開催概要

企画展名	平成29年度水戸市埋蔵文化財センター企画展 遺跡でプラタモリ in 水戸展 ～再発見！水戸黄門はなぜ人気があった？～
主催	水戸市教育委員会
開催期間	平成29年11月3日（金・文化の日）～平成30年2月25日（日）
会場	水戸市埋蔵文化財センター 1階ロビー及び縄文くらしの四季館
展示・編集	関口慶久（埋蔵文化財センター）

引用・参考文献

- (公財)茨城県教育財団 2012『水戸城跡－茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事地内埋蔵文化財調査報告書－』
(公財)茨城県教育財団 2015『水戸城跡－水戸地方検察庁仮庁舎建設事業地内埋蔵文化財調査報告書－』
茨城県・水戸市教育委員会 2006『水戸城跡－三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書－』
関口慶久 2017「常陸・水戸城と城下町」『伝統的武家の城下町』北関東研究集会・伝統的武家の城下町事務局
西原昇治 2008「笠原水道施工に関する一考察」（井戸ライフホームページ）
(宗)八幡宮 2011『水戸市指定有形文化財 八幡宮拝殿及び弊殿保存修理工事報告書』
水戸市 2011『近世日本の学問・教育と水戸藩Ⅱ』
水戸市教育委員会 2009『東組遺跡（第1地点）－物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
水戸市教育委員会 2009『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』
水戸市教育委員会 2010『笠原水道－第6次・10次・11次発掘調査報告書－』
水戸市教育委員会 2010『平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』
水戸市教育委員会 2011『平成20年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』
水戸市教育委員会 2014『水戸城跡発掘調査報告Ⅰ－二の丸曲輪彰考館の調査(1)－』
水戸市教育委員会 2017『七面製陶所跡－遺構・遺物編－』
宮田和彦・関口慶久 2017「水戸城大手門・大手道の調査」『平成29年度茨城県考古学協研究発表会資料』

協力者・協力機関一覧（敬称略、順不同）

小野寺 淳	NHK制作局第2制作センター
小畑 のり子	NHK水戸放送局
飛田 邦夫	株式会社NHKエンタープライズ
西原 昇治	水戸市政策研究会
藤田 崇文	

平成29年度水戸市埋蔵文化財センター企画展

遺跡でプラタモリ in 水戸展 ～再発見！水戸黄門はなぜ人気があった？～ 展示解説シート

平成29（2017）年11月3日 発行

編集 水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課 埋蔵文化財センター
〒311-1114 水戸市塩崎町1064-1 TEL 029-269-5090

発行 水戸市教育委員会

印刷 (社福)水戸市社会福祉協議会 水戸市身体障害者就労支援施設のぞみ